

東広島市、保育の向上へ広島大と連携 教員らが現場を回り調査・助言

地域

広島

12:00 （最終更新: 12:30）



広島県東広島市は、幼児教育の専門研究機関のある広島大などと連携し、保育士と行政、研究者が一体となって保育の質向上に取り組む「未来を担うこどもの育ちサポート」を始動させた。専門家が保育所などの現場に出向いて現状や課題を調査・分析し、アドバイスする。

創立から50年を超える歴史のある広島大大学院人間社会科学研究科附属幼年教育研究施設（幼研）のスタッフや、連携する県内の大学教員が外部アドバイザーとして、市内の保育現場を訪問。本年度は10カ所を想定し、子どもとの接し方や職場環境について指導や助言をする。

さらに、外部アドバイザーの行かない現場も含めた市内18カ所の施設で保育士と保護者を対象に、子どもの育ちに関するアンケートを実施。「好きな遊びにじっくりと取り組んでいる」「苦手なことも物おじせずやってみようとする」といった項目について達成度を評価してもらい、効果の「見える化」も図るという。

24日にオンラインであった初回の研修会には、市内約60施設の保育施設長たちが参加した。幼研の七木田敦教授が、昨年度に先行して実施した施設でのアンケート結果などを紹介。友達との関わり方など家庭では感じにくい成長は、保育施設の側が積極的に発信していく必要があることを説明した。

参加した黒瀬町の中黒瀬保育所の村瀬文女（あやめ）所長は「これまで感覚でしか分らなかった保護者との認識の差を、データで知ることができた」と話した。

子育て支援に力を入れる市は昨年度、子ども主体の保育への転換などを目指したアクションプラン（行動計画）を策定。プランをさらに進める狙いでサポート事業に着手した。（高橋寧々）